

飯能の市(いち)の範囲を示す絵図

飯能市立博物館 学芸職員 尾崎 泰弘

当館では現在、真能寺村(現在の八幡町・原町など)の名主を務めていた双木(なみき)利夫家文書の目録刊行作業を進めています。その中に、「武蔵国高麗郡飯能・久下分・真能寺三ヶ村入会村絵図(むさしのくにこまぐんはんのう・くげぶん・しんのうじさんかそんいりあいむらえず)」と表題のある絵図があります。文書には作成年代が記されていませんが、江戸時代のものであることはほぼ間違いありません。

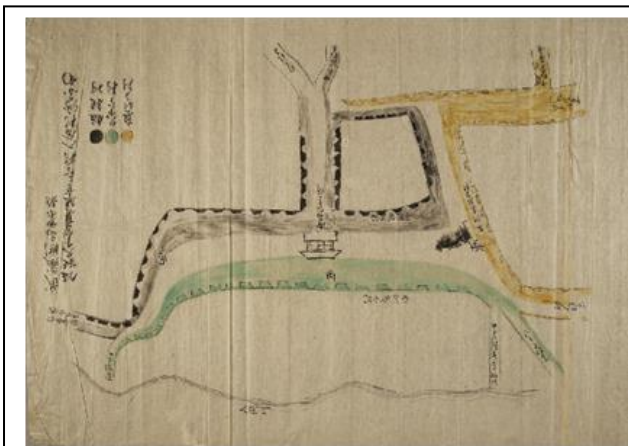
絵図は「高札場(こうさつば)」のある左右の往来(おうらい)[=現在の大通り]を中心に描かれ、その北側が飯能村(黒)、南側(青)が久下分村、右にあるたて方向の通り(広小路交差点から北へ向かう道)の東側

が真能寺村(黄)に塗り分けられています。タイトルが「三ヶ村入会村絵図」ですから、江戸時代前期(1600年代後半)以降に、月 6 回定期市が開かれていた

「町」が飯能村・久下分村・真能寺村の 3 つの村にまたがっていたことを示したものと考えられます。

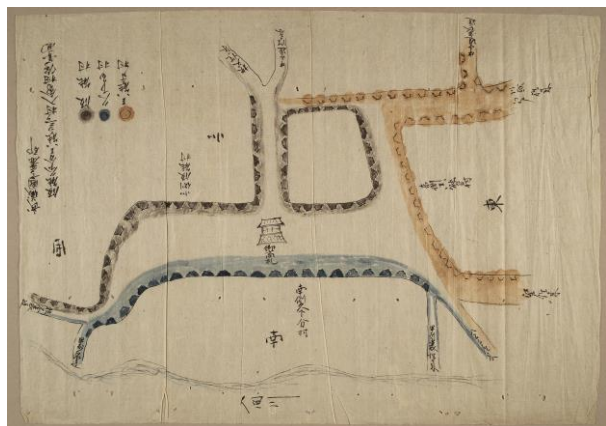
実はこの絵図は 2 枚あり、比較すると着色のされ方に若干の違いがあるのですが、共通するのは通りには台形で示される商家があるところとないところがあり、また往来も色が塗られていない空白の部分があるところと、べた塗りされているところがあるという点です。べた塗りされているのは、右側に描かれた真能寺村から東へ向かう 2 本の道(1 つは上=北側の旧めいわどうの角から東へ向かう道、もう一つは下側の、現在の「銀座通り」)のうち、北側の道(以下「北道」とします)がそれに当たります。広く空白となった部分の多くは現在の大通りに当たることから、それは市(いち)が開かれた往来を指しているのではないのでしょうか。ということは少なくとも真能寺村の北道には市日に周辺からやってきた商人たちが開く「見世」はなかったこととなります。逆にいうと空白のある高麗横丁には見世が開かれていたこととなります。

そこで想起されるのが、高麗横丁の入口に位置する、「入口」の屋号を持つ商家(入口電業さん)の存在です。市が東西の通りにだけ開かれているのであれば、その中ほどにあるこの家は「入口」には当たらず、屋号にする意味が分かりません。しかし、そこから北へ入る往来(吾野・秩父へ向かう道)も市の範囲ということであれば、そこが北に広がる市の「入口」にあたり、目印になるので屋号として採用したと考えられないのでしょうか。



双木利夫家文書No.1166 ア

「武蔵国高麗郡飯能・久下分・真能寺三ヶ村入会村絵図」



双木利夫家文書No.1166 イ

「武蔵国高麗郡飯能・久下分・真能寺三ヶ村入会村絵図」

アとイでは塗られている範囲が少し異なる。

実はこの絵図は、今から 60 年前に出された中島義一氏の著書『市場集落』の中で紹介されています。今回の整理でこの原資料が発見され、空白の部分のあるところとないところの書き分けが確認されました。双木家文書にはこれ以外にも市立ての場所に関わる史料もあり、目録発行を契機としてさらに飯能の市街地の成り立ちが明らかになっていくことが期待されます。

【参考文献】

中島 義一『市場集落』古今書院 昭和 39(1964)年 9 月
飯能市立博物館 特別展展示図録『飯能縄市』令和 3(2021)年 10 月